

論文

移行論争とポール・A・バラン

——資本の本源的蓄積と客観的理性——

古松 丈周

要 旨

本稿の課題は、ポール・A・バランがふたつの移行論争を乗り越える議論を示していたことを明らかにすることである。ここで、ふたつの移行論争とは、1950年代にモーリス・ドップ、ポール・M・スウィージーを中心とした論争、そして1970年代にアンドレ・G・フランクとエルネスト・ラクラウを中心とした論争である。封建制から資本主義への移行について、ドップはその内的矛盾に起源を求め、スウィージーは商業の復活による外的力にその起源を求めた。後にフランクはこの論争を内的矛盾と外的力の相互作用として止揚し、資本主義の進入によって資本主義となった周辺を低開発と分析した。フランクを批判したラクラウは、低開発は封建制と資本主義の両立から生まれることを指摘した。バランは『成長の政治経済学』でこれらの論点をすでに指摘し、さらに資本主義的合理性を歴史的に把握し、批判する客観的理性による批判を示していた。

キーワード：ポール・A・バラン；移行論争；客観的理性；資本の本源的蓄積；低開発の発展；
モーリス・ドップ；ポール・M・スウィージー；アンドレ・グンダー・フランク；
エルネスト・ラクラウ

経済学文献季報分類番号：01-20；02-10；02-31；03-10；03-49

はじめに

フレドリック・ジェイムソンは、「誰かがかつて言ったように、資本主義の終わりを想像するより世界の終わりを想像する方が簡単だ¹⁾」という。この言葉を受けて、マーク・フィッシャーは「資本主義が唯一の存続可能な政治・経済制度であるのみならず、今やそれに対する論理一貫した代替物を想像すること（原文はイタリック、以下同様）すら不可能だ、という意識が蔓延している²⁾」という。これまで資本主義批判には社会主義をはじめとするその代替物が想像されていた。それすらも不可能となったというのである。様々な代替物が、そして革命への展望が霧散してゆくなかで、「資本主義」が所与の「自然」なもので

あるかのように、「資本主義」について思考することすら困難な状況になっているのである。

しかし、「資本主義」とは何かという問いをめぐって、これまでも様々な議論がなされてきた。「資本主義」の矛盾、危機、そして限界——格差、利潤率の低下、貧困問題、帝国主義、大不況、ファシズム、地球環境問題等々——を目の当たりにして、そのオルタナティブを展望しながら「資本主義」とは何かを問い続けてきたのである。なかでも注目を集めたもののひとつが、いわゆる「移行論争」である。モーリス・ドップの『資本主義発展の研究³⁾』に対するポール・M・スウィージーの批判で始まった論争は、封建制から資本主義の移行をテーマとしながら、「資本主義」のメルクマールについて大きく二つの立場を示すことになった。封建制の内的要因、生産様式の「内部矛盾」を重視するドップの立場と、外的要因、すなわち商業・都市・市場の「外的力」を重視するスウィージーの立場である⁴⁾。

その後も「資本主義」のメルクマールをめぐって、重複する問題意識を有した論争が繰り返されており、それらについても多くの紹介、検討がなされてきた。1970年代はじめ、ラテン・アメリカの「移行」、「資本主義」発展をテーマとして、「フランク＝ラク라우論争⁵⁾」が起こった。この論争は、世界市場での商品交換がラテン・アメリカに及んだことから、16世紀以降ラテン・アメリカにおいて「資本主義」が成立していたとするアンドレ・グンダー・フランクに対して、「資本主義」概念を生産関係のみで用いるエルネスト・ラク라우が批判を向けたことにより始まった。また1970年代半ばに、ロバート・ブレナーは「ブレナー論争」を巻き起こし、そのなかでスウィージー、フランク、さらにイマニュエル・ウォーラーステインらを「商業化モデル」と批判し、独自の議論を展開した⁶⁾。これらの論争は、「新移行論争」とも呼ばれ、資本主義の起源、資本主義とは何かをめぐって論争が展開した。その後もロバート・ブレナーと同じく「政治的マルクス主義者」で *Monthly Review* の編集を務めたエレン・メイクシンス・ウッドの『資本主義の起源⁷⁾』などの研究もある⁸⁾。

本稿の課題は、直接これらの論争には関係していないものの、論争の中心人物と極めて深い関係にあり、同じ問題圏で研究を深めていたと考えられるポール・A・バランの議論を検討することである。周知の通り、バランとスウィージーは緊密に連携し、*Monthly Review* を中心に幾多の成果を発表している。また、バランの低開発国分析は、フランクの「低開発の発展」テーゼに、そして「資本主義」理解に不可欠の影響を及ぼしている⁹⁾。フランクは以下のように言っている。

「私にとっては、ポール・バランが低開発の発展を世界的規模での資本主義にもとづく発展のコインの裏面として体系的に検討したことで、過去、現在、そして未来の世界史を理

解する道が開かれた¹⁰⁾」。

「私は、ポール・バランとともに、過去に低開発を生み出し、現在も引き続き低開発を創り出しているのは、世界的にも国民的にも他ならぬ資本主義であると考えている¹¹⁾」。

バランはこのような立場にありながら、スウィージーやフランクとは異なった議論を展開しており、これらの論争を明確にし、さらに発展させる結節点になり得ると考えられるのである。バランは、「移行論争」の舞台となったアメリカの雑誌 *Science & Society* に、当時「経済進歩と経済余剰¹²⁾」という論文を発表している。後に、『成長の政治経済学¹³⁾』においてもこの「経済余剰」は再び詳述されており、独自の資本主義観が見られるのである。本稿では検討することはできないが、近年、この「経済余剰」概念を発展させて「バラン比率」という概念を作り、近年の統計資料を用いた分析を検討することで、この概念が「移行論争」に新たな光を当てるとする指摘も存在する¹⁴⁾。以下では、まずドップ、スウィージーの「移行論争」、そしてフランクのドップ＝スウィージー論争についての総括とフランク、ラクハウの論争について、本稿に関わる範囲で素描し、論点を整理する。冗長でこれまでの研究に屋上屋を架すことにもなるが、論点を整理するために不可欠の作業となる。その上で、バランの議論を検討することで、「資本主義」の成立と終焉について考えたい。

第1章 封建制の衰退に関するドップ＝スウィージーの分析

ドップは「資本主義」という用語が様々な使い方をされてきたことを踏まえて、歴史研究、歴史解釈に多大な影響を与えてきた三つの意味づけを検討している。第一の意味づけは、ヴェルナー・ゾンバルトやマックス・ウェーバーに代表されるもので、一つの時代を特徴づける経済形態や諸関係をつくり出す「精神」が資本主義を意味づけると考える。ドップによれば、ゾンバルトは、資本主義の起源を「計算および合理性という『ブルジョワ精神』と企業あるいは冒険の精神との総合」に求め、ウェーバーは「『合理的に組織的に利潤を求めるといふ心がまえをえがき出すために』資本主義の精神という言葉を用いた¹⁵⁾」。

第二の意味づけは、はっきり定式化されていないが暗黙のうちに承認を得ており、資本主義を「遠隔市場のための生産の組織」と同様に考えるもので、「『経済活動の中心的な原則を無制限の利潤におく』ような『交換経済の制度』¹⁶⁾」が資本主義を意味づけると考える。ドップによれば、このような考えは、中世的世界の「自然経済」に、独自の商業取引が浸入し始めることに資本主義の起源を求めている。さらに、市場の広がり諸段階に応じて資本主義

の成長段階が決まると考えているという。つまり資本主義とは「商業」制度なのである。

そして、第三の意味づけが、マルクスによるものである。ドップによれば、マルクスが資本主義の本質を求めたのは、「生産手段の所有の仕方、および生産過程との関連から結果する人間と人間の社会的関係¹⁷⁾」である。資本主義とは、労働力が商品となり市場で売買される制度であり、その歴史的前提が「社会のごく一部分を構成する階級」が生産手段を所有し、他方で労働力を販売するしかない無産階級が出現することである。資本を持つ人々が利益をむさぼるだけでは足りず、「かれらの資本が労働を拘束して、生産において剰余価値を創造させるように、用いられるのでなければならない¹⁸⁾」のである。

ドップはこれら三つの相互に関連しながらも異った視点に立つ定義を検討した上で、第三のマルクスによる定義で資本主義という用語を使用するという。そして残り二つの定義を退ける理由を説明する。ドップによれば残り二つの定義は、「貨幣の営利的な投下という事実」に注意を向ける考え方」とともに、一つの時代に限定できないものである。つまり、第一、第二の定義に拠るならば、歴史のほとんどすべての時代がある程度は資本主義となり、資本主義は歴史を通して見られるものとなる。それゆえ、独自の経済制度の定義として役に立たず、資本主義に特有な生産様式、つまり「資本が労働を拘束」し、「剰余価値を創造」するように用いられる生産様式こそが資本主義のメルクマールとなるのである。

一方、ドップのいう封建制とは、「直接生産者とかれの直接の主人または君主との関係、および両者をむすぶ社会的義務の社会経済的内容」、つまり「生産様式」であり、「われわれが一般に農奴制と考えているものに事実の上では一致する」ものである¹⁹⁾。さらにこの社会制度では、生産用具は単純で、生産活動は個人的性格を有し、分業は原始的な発展水準にとどまっており、「家計や共同体の直接的必要のための生産諸条件と結びついており、広汎な市場のための生産諸条件と結びついていない²⁰⁾」。

ドップはこのような資本主義と封建制の定義にもとづいて、封建制から資本主義への移行を明らかにしようとする。本稿では、封建制の衰退を中心的に検討するが、ドップが執拗に批判するのは、資本主義の第二の定義であり、それにかかわる封建制の定義である。ドップは、資本主義の第二の定義について、「封建制度をなかんずく貨幣的「交換経済」と対立した自足的な「自然経済」——「消費を目的とした経済」と考えているようである²¹⁾」、という。つまり、この定義では、「自然経済」に、商業取引が浸入することに資本主義の起源を求めているのである。ドップは、この立場を批判して、1100年以後の西ヨーロッパでの商業の復活が封建制に与えた破壊的な影響について、それが必ずしも封建制の衰退を意味しないことを指摘する。ドップも商業の復活が封建制に与えた影響の重要性を否定するわけではない。しかし、商業の復活により15世紀末に東ヨーロッパでは農奴制の強化（ドップはエンゲ

ルスのいう「再版農奴制」を指摘している）が見られたのである。先にふれたように、商業は常に存在してきたのであり、そのあり方が経済に影響を与えることはあっても、経済制度を最終的に決定するのは生産様式なのである。ドップは以下のように言っている。

「伝統的な解釈であきらかに見落とされているのは、生産様式としての封建制の内部関係と、それらがこの制度の分解や残存を決定するさいに演じた役割との分析である。そして実際の結果は市場という外部からの衝撃とこの制度の内部関係との複雑な絡みあいの結果として取り扱わねばならないにしても、ある意味では後者こそ決定的な影響を及ぼしたと言うことができる²²⁾」。

そしてドップは、封建制衰退の原因を、支配階級の収入の必要の増大が、生産者への抑圧を耐えられないほどに増大させたことに求めている。封建的支配階級が収入を増大させるためには、軍備を増強し臣下を増やすか、絶対的剰余価値の増大に頼るしかなく、そのために生産者への抑圧が強化されたのである。商業の発展も封建的抑圧を強め、市場向けの剰余を生産する可能性を開くことで、農民層への抑圧を強化したのである。その結果、生産者の大量の逃散が引き起こされ、14、15世紀には封建経済が危機に陥ったのである。つまり、封建経済の危機は、封建制度の内部から生み出されたものなのである。

このようなドップの封建制衰退の理解について、スウィーギーは批判することになる。もっとも、スウィーギーはドップの研究を高く評価し、以下のように主張している。

「われわれは、資本主義から社会主義への移行の時代に生きている。そしてこの事実は、ある社会体制から別の社会体制へのかつて行われた移行についての研究を興味深いものにしてしている。とりわけこのことは、なぜモーリス・ドップの『研究』がかくもタイムリーで重要な著書なのかという理由の一つである²³⁾」。

資本主義が社会主義に移行する時代にあるというスウィーギーの認識において、資本主義に先行する時代から資本主義の成立への移行、そして資本主義の発展を分析するドップの研究は極めて重要な意義を持つものなのである。しかし、その分析のなかで、封建制から資本主義への移行にスウィーギーは異議を唱えている。スウィーギーがまず批判するのはドップの封建制理解、すなわち封建制と農奴制の混同である。スウィーギーは、「この規定は生産システム〔としての封建制〕を識別していない点において欠陥を有しているように思われる。若干の農奴制は、明らかに封建的とは言えないシステムにおいても存在しうる²⁴⁾」という。

ドップは生産様式を重視するあまり、生産様式と経済システムを明確に区別していないのである。そしてスウィージーは、封建制の決定的特徴として、封建制が「使用のための生産システム」であることを指摘する。ドップもこれが封建制の特徴であることは否定しない。しかし問題はその先にあり、スウィージーはマルクスを引きながら、封建制では「剰余労働にたいする無制限な欲望は生産そのものの性格からは生じない」ことは明らかで、「資本主義の下で存在する生産方法の絶え間ない革新のための圧力は何ら存在しない〈中略〉、社会の全生活を慣習と伝統に向ける非常に強い傾向が存在する」のである²⁵⁾。もっとも、封建制は安定した体制ではなく、領主間の競争、人口増加のために不安定であったが、それも生産方法の革新のための圧力とはならず、むしろ封建制下での生産方法と生産関係を維持する方向に働いたのである。スウィージーは以下のように言っている。

「もしドップが、西ヨーロッパ封建制のこの生得的に保守的で変化に抗する性格を十分に考慮していたならば、中世後期における西ヨーロッパ封建制の解体と衰退を説明するために提唱している彼の所説を変更せざるをえなかっただろう、と私は信じている²⁶⁾」。

スウィージーによれば、封建制は不安定であるものの、変化に抗するシステムであり、その危機は内部から生み出されるものではないのである。

次に、封建制衰退の原因についてである。ドップが封建制衰退の原因と考えた「支配階級の収入の必要の増大」について、さらにそれに加えて封建制を危機に陥れた「農奴の土地からの逃亡」について、スウィージーはそれらの要因を封建制度の内部から説明することはできないとする。スウィージーはドップが挙げている要因のうちの二つを批判する。第一に、農奴の利益無視と戦争および略奪である。農奴の利益無視、戦争、略奪は全期間を通じて存在しており、封建制の特徴とは言えない。さらにドップが指摘する寄生階級の増大についても、農奴人口の増加と釣り合っており、問題とはならない。また、封建的支配階級の奢侈の増大については事実であるものの、封建制内部から生まれるものではなく、外部で生じたものだという。さらに、農奴の土地からの逃亡については、都市の成長が磁石となって農奴を引きつけたのであり、都市の成長がなければ浮浪人口になるより荘園にとどまることを選ぶはずだとスウィージーは指摘するのである。

第2章 資本主義の起源をめぐる弁証法

スウィージーはドップの諸説を批判し、「封建制衰退の根本原因は商業の発展であったと

主張する部分を震撼させることには成功しなかったように思われる²⁷⁾」と結論づける。つまり資本主義の第二の定義を否定するのに成功しなかったというのである。そしてスウィーギーは第二の定義を受け入れ、以下のように言っている。

「私には、この関連における重要な矛盾は「貨幣経済」と「自然経済」のあいだではなく、市場のための生産と使用のための生産のあいだにあると思われる²⁸⁾」。

スウィーギーは、商業のインパクトは「自然経済」に「貨幣経済」が浸入したことにあるのではなく、商業が市場のための生産システムを生み出し、使用のための生産システムにインパクトを与えたことが問題だというのである。

スウィーギーも商業が常に存在してきたことを認める。商業は封建制にとっても必要なものであった。しかし、スウィーギーによれば、相対的に高価な財の遠隔地貿易が10世紀に成長し、商業、積替えの中心地が商品生産、つまり市場のための生産の発生源となった。さらに、その都市で高度に専門化と分業が進み、その商品が都市住民、そして農村にも供給されるようになったのである。つまり、遠隔地商業が交換のための生産システムを成立させたのである。

さらに市場の生産システムが使用のための生産システムと併置されると、交換経済が使用経済に影響を与えるようになる。スウィーギーは、4つの影響を指摘している。まず、荘園の非能率性への影響であり、荘園の家内仕事場は消滅していった。第二に生産者の態度であり、貨幣もしくは貨幣請求権という形態で富を求めることが可能となり、富の所有が交換経済、そして交換経済と接触した者の目的となった。第三に、封建的支配階級の嗜好の発達への影響であり、奢侈が進むことになった。第四に、都市が勃興し、その良好な生活を目指す農奴が荘園から逃亡する主要な原因となったのである。

もともとドップと同様にスウィーギーも商業の勃興によって自動的に農奴制が解体したわけではないと主張する。スウィーギーによれば、「交換経済は、奴隷制、農奴制、独立自営労働、あるいは賃労働と両立可能なのである²⁹⁾」。そこでスウィーギーが農奴制を解体した決定的に重要なものを二つ指摘する。一つは都市の勃興により荘園に残った農奴の地位が上昇したことである。ドップも認めるように領主が農奴に譲歩した結果、封建的貢租の貨幣地代への転化が進んだのである。二つ目は、荘園が市場のための生産に転じたものの非効率であったため、新しい型の生産関係と新しい形態の組織が求められたことである。封建制が強化され、「再版農奴制」が成立したのは、交換経済の中心地から遠く東に離れた場所だったのである。

ドップとスウィージーの論争では、ドップが「内的要因」、「生産様式」を重視し、スウィージーが「外的要因」、「市場」を重視したと言われてきた。先に論点を整理したとおりである。もっともこのような立場の相違は、何らかの一次資料の理解から生まれた違いではない。ドップ、スウィージーともに一次資料の分析による議論を展開したわけではなく、二次文献を利用してその理解、解釈をめぐって論争を展開した。そこで二人の立場を分けた一つの要因が、マルクスに対する理解にあったと考えることは可能であろう。ドップ、スウィージーともにマルクス主義者として、マルクス、あるいはエンゲルスに拠って議論を進めている。この点については、ドップの資本主義の定義が端的に表わしているし、スウィージーも随所でマルクスのことばを引いている。例えば、以下の有名なマルクスの記述である。

「商品流通は資本の出発点である。商品資本と発達した商品流通すなわち商業とは、資本が成立するための歴史的な前提をなしている。世界貿易と世界市場とは、16世紀に資本の近代的生活史を開くのである³⁰⁾」。

さらに、ドップ批判からしばらくたった後、バランとスウィージーの書簡では、当時明らかになったエンゲルスのパンフレットがスウィージーの主張を補強するものとして注目されている³¹⁾。しかし、マルクスに拠って議論を進めても、双方の立場に立った記述が見られ、マルクスの記述は彼らの議論の正否を判断する基準とはなり得ない。また、上では触れていないが、この論争のもう一つの主要な論点、すなわち資本家の起源についても同様のことが言える。沖が指摘するように、マルクスの答えは必ずしも明快ではなく、「借地農、独立の小工業者、高利資本及び商人資本という三通りの答えを提示しており、とくに、産業資本家の原型としては、後二者を挙げているのである³²⁾」。

「内部矛盾」と「外的力」のどちらが「移行」において重要であったのか。この問題についてどちらを重視するかはともかく、ドップ、スウィージーともに「内部矛盾」と「外的力」の相互作用が存在し、二者択一ではないことで一致している³³⁾。この点については、ラクラウと論争を展開したフランクも論争後に発表された論文で同様の指摘をしている³⁴⁾。フランクは「制度変化は主として何が「好調な取引」かで決まる」として、以下のように言っている。

「外部」と「内部」の矛盾と発展という観点での説明の理論的対立を部分的に解決することができるのは、取引が好調なときに、「外的」矛盾がより直接的な重要性をもつように

思われ、そして取引が不調なときに、「内的」矛盾がより直接的な重要性をもつように思われることに注目することである。したがって、好調な、そして不調な取引の様でない複合的な発展において、「外的」、そして「内的」要素は統合された弁証法的役割を果たすのである³⁵⁾」。

つまり、取引が好調なとき、つまり外部と内部が密接につながるとき、「外的」矛盾がシステムの変化に大きな影響を与え、外部と内部の関係が希薄となると、「内的」矛盾がシステムの変化に大きな影響を与えるのである。東欧において「再版農奴制」が広がり農奴制が強化されるのも、このような観点から説明が可能なのである³⁶⁾。

さらにフランクは、ドップとスウィージーの論争を新たな方向に導く必要を指摘している。「外的」商業の拡大が周辺において生起していることを、従属理論、世界システム論につながる視点を示すのである。長くなるが引用しておく。

「封建制から資本主義への移行についての論争において、モーリス・ドップが支持するのは生産関係の決定的な役割であり、想定されるところでは、衰退しつつある封建制と出現しつつある資本主義に「内在的」であり、さらに西ヨーロッパのある部分に内在的である。ポール・スウィージーは「流通主義的」立場と見なされ、想定される解釈では、移行が生じるのは封建的、そして資本主義的生産関係の両方に「外在的」な交換関係からであった。そして恐らくはヨーロッパにとって「外在的」であり、論争で彼らはヨーロッパの商業的拡大が重要であること、そして「多くの利益を生む (productive)」編入、とりわけ新世界の鉱業経済を蓄積過程へ編入したことが重要であることを強調していた。論争は、しばしば卵が先か鶏が先かの論争とみなされてきたのであり、ドップはヨーロッパの「内的」な生産関係の転形（「中心」における）は、商業の拡大の原因となったと主張していると言われ、他方でスウィージーは、ヨーロッパの「外的」商業の拡大（周辺における）は、ヨーロッパにおける封建制から資本主義への生産関係の転形を決定したと主張していると考えられたのである³⁷⁾」。

ドップの視点では、封建制の内部矛盾が問題となっているばかりでなく、ヨーロッパ内部の問題であり、スウィージーの視点では、生産関係の外部と同時にヨーロッパの外部、さらにその外部が、商業の拡大とともに周辺として蓄積過程に組み込まれることを理論的に含むことが可能なのである。つまり商業を通して中心と周辺が形成され、外部が周辺として経済システムに組み込まれてゆく過程を問題とすることができるのである。この過程は、中心が封

建制から資本主義へと移行してゆく過程であると同時に、世界資本主義が成立に向かう過程でもあるのだ。そしてこの過程の理解こそが、バランからフランクが受け継いだものであり、フランクとラクハウの論争を引き起こしたものである。

第3章 「低開発の発展」と「資本の本源的蓄積」

1971年、*New Left Review* に掲載された「ラテンアメリカにおける封建制と資本主義³⁸⁾」で、ラクハウは生産領域ではなく商品交換領域での現象、つまり市場とのつながりの有無によって、「封建制」と「資本主義」を区別することを批判する。その代表者とされるのがフランクであった。

フランクは1960年代から二重構造論を主張するラテンアメリカの諸共産党を批判し、論争を展開していた。二重構造論は、ラテンアメリカを商品交換経済である資本主義と交換経済から孤立した封建制に二分し、農業部門を「未開発」な封建制と考えた。それに対してフランクは、ラテンアメリカは16世紀に世界資本主義に組み込まれて以降、資本主義であると主張して論争を展開したのである。ラテンアメリカはヨーロッパを中枢とする世界資本主義に衛星として組み込まれ「低開発の発展」を余儀なくされた。「未開発」な封建制とみえるのは、資本主義によって発展し押しつけられた「低開発」なのである。

ラクハウは「資本主義」、あるいは「封建制」という用語は生産関係によって定義される用語であり、二重構造論とそれを批判するフランクが、ともに市場の有無によって「封建制」と「資本主義」を区別することを批判した³⁹⁾。ラクハウは多くの点でフランクの議論を高く評価しており、ラテンアメリカが商品交換に接続されていることにも同意している。しかし、市場の有無をメルクマールにすること、言い換えれば、市場が存在することでラテンアメリカを資本主義と規定することにラクハウは反対するのである。ラクハウは以下のように言っている。

「ラテンアメリカにおいて支配的な生産関係の前資本主義的特徴は、世界市場向け生産と両立不可能ではなかつたばかりではなく、実際には世界市場の拡大によって強化された。世界市場の需要の成長がアシエンダの封建的体制の剰余の極大化を刺激するにつれて、農民にたいする農奴制的苛斂誅求も強化される傾向にあった。このように、外国市場の拡大は封建制を打ちくずす力として作用するどころか、その影響はむしろ封建制を強化し固定化することになった〈中略〉。これは東ヨーロッパが西ヨーロッパ向けの一次産品輸出の実質的成長が可能となった16世紀以降この方、しだいに経験したことである。この過程

は、周辺諸地域の封建的再編の基礎となった⁴⁰⁾」（傍点は原著ではイタリック）。

ラクラウによれば、農業部門の生産関係が封建制であると肯定しても、二重構造論を認めることにはならない。フランクがこの点で二重構造論と同じ誤謬に陥り、近代的部門と伝統的部門が相互関係をもたないことを封建制のメルクマールにしていることが問題なのである。近代的部門が資本主義化していても、あるいは資本主義化するからこそ、周辺が封建的に再編され、封建制が強化されているのであり、外国市場の拡大がかならずしも農業部門に資本主義をもたらすわけではないのである。この点では、フランクは旧移行論争から後退しているともいえるだろう。そして資本主義とつながった封建制社会では、企業家の利潤極大化が農奴的搾取を強化するのである。ラクラウに拠れば、生産関係としての資本主義と封建制、この二つの生産関係によってできあがる社会体制を正確に理解することで、「低開発の発展」も正確に分析しえるのである。ラクラウは以下のように言っている。

「一部門の近代性は他部門の後進性の関数であり、したがって、〈近代的部門〉の〈左翼〉をよそおう政策はなんら革命的ではないと断言できる。それとは反対に、全体としての体制と対決し、一方の極における封建の後進性の維持と、他方におけるブルジョワ的ダイナミズムの外見上の進歩との間に存在する、確たる一致を指摘することが正しい。このようにしてはじめて、フランクに同意して——ただし、われわれの理論は生産関係にもとづくのであって、市場関係のみにもとづくものではないという点をのぞいて——、発展こそが低開発を生みだす、ということを効果的に証明できるものであると確信する⁴¹⁾」。

ここで、ラクラウは旧移行論争でも問題となった論点を指摘することになる。フランクがドップと同様に陥ることになった経済システムと生産関係の混同である。ラクラウは経済システムと生産関係を峻別し、その関係を問題とする。ラクラウは生産様式を以下のように説明する。

「〈生産様式〉とは、生産手段所有の一定形態と結合した社会的生産諸力・諸関係の結合された複合体である、と理解する。生産諸関係の総体のなかで生産手段の所有と結合したものを基本的な関係と考える。というのは、この関係が経済余剰の循環形式、効果的な分業の度合い、すなわち発展のための生産諸力の特殊能力にそれぞれ応じた基盤を決定するからである。生産諸力の発展水準や成長リズムは経済余剰の行先しだいによる⁴²⁾」。

他方でラクラウのいう経済システムは、「経済の異なる部門間あるいは異なる生産諸単位間の相互関係⁴³⁾」であり、様々な生産様式を含みうる。そしてラクラウによれば、資本主義的生産様式と、世界資本主義体制への参加という二つの概念が混同されてきたのである。このようなラクラウの議論は「生産様式接合論⁴⁴⁾」に道を開くものである。さらに、生産様式と経済システムの峻別とその関係の検討は、資本主義下で継続する「資本の本源的蓄積」という問題圏の検討を必要とする⁴⁵⁾。利潤率の低下、過少消費などによって資本主義が行き詰まるとき、その不可能性に抗して資本主義の外部を取り込み、資本蓄積を強化し、推し進めるようになる。この過程の分析こそが、生産様式と流通の弁証法、中心による周辺の余剰収奪と「低開発の発展」を明らかにする。そして資本主義の成立をめぐる、その課題に接近していたのがバランの分析なのである。

第4章 新旧移行論争とバラン

バランは封建制から資本主義の移行そのものを主題的に論じることはなかった。しかし、移行についての言及は散見される。なかでも注目されるのは、低開発の原因についての分析で資本主義の成立を検討していることである。バランは、低開発を一人当たりの産出量の低さに求め、資本主義的發展が起こらなかった原因を検討すべく、資本主義の成立条件を以下のように定式化している。

「第一に、農民たちのますます激化する大量的な土地離脱と反乱、およびその結果生ずる潜在的な工業労働力の発生と並んで、下層の農業人口に対する封建的抑圧の強化に伴って生ずる農業産出量の緩慢ではあるがかなり著しい増大、が見られた。第二に、その及ぶ範囲と一般化の度合いにおいて程度の差こそあったけれども、分業がかなりの程度に普及し、それとともに商人・手工業者階級の成長とそれに伴う都市の発展とが見られた。そして第三に、その程度の差こそあれ着実に拡張し台頭しつつあった商人および富農階級の手、に、多少とも顕著な資本の蓄積が行われた〈中略〉。資本主義が発生するための不可欠の前提条件はこれらすべての諸過程（およびその他数多くの副次的に展開された諸過程）の合流である〈中略〉。しかも「資本主義」という言葉が明らかに示唆しているように、当然に戦略的に重要な意義を与えられねばならないのは第三の過程——資本の本源的蓄積——である⁴⁶⁾」。

ドップが主張した内的矛盾としての封建的な生産様式の衰退と資本主義的生産様式の前提と

なる二重の意味で自由な労働者、そしてスウィージーが主張した交換経済の発展と都市の興隆、そして資本の本源的蓄積、これらがすべて弁証法的に発展し、資本主義成立の条件が整うのである。その意味でフランクの総括を具体的に展開する議論を提示していたのである。さらに、ここからバランは独自の考察を進めることになった。バランにとって、第三の過程、つまり資本の本源的蓄積が重要なのは、西ヨーロッパにおいて資本主義が成立した理由、そして他の文明において資本主義が成立しなかった理由を説明することになるからである。バランは以下のようにいう。

「今日の低開発諸国への西ヨーロッパ資本主義の侵入は、一方では資本主義制度が発展するためのある種の基礎的前提条件の成熟を不可抗的な力をもって促進させはしたが、他方ではそれと同じ力をもって他の種の基礎的前提条件の成熟を阻害した。西ヨーロッパ資本主義が当該国の、すでに蓄積された経済余剰となお経常的に生み出されている経済余剰との大部分を持ち去ったことは、その国の資本の本源的蓄積に重大な支障をもたらさざるをえなかった。商品流通の拡大や、大多数の農民・手工業者の貧困化や、西ヨーロッパの技術との接触は、資本主義の発展に対して強力な刺激を与えはしたが、またこの発展を強制的にその正常の経路から逸脱せしめ、西ヨーロッパ帝国主義の諸目的に合致するように歪め損わせてしまったのである⁴⁷⁾」。

バランによれば、西ヨーロッパは地理上に位置によって航海術を発達させていた一方で、自然資源に乏しく経済発展が遅れていた。それゆえ、熱帯生産物、さらに東洋の高度な技術によって生産された高価な商品を得るために争奪行為を開始したのである。その結果、広範囲な貿易、略奪、奴隷売買、金鉱発見などを通して蓄積が進んだ。他方で、アジア、アフリカ、東欧では、西ヨーロッパの資本主義が、前資本主義的段階、あるいは資本主義的発展の萌芽的状态の社会に浸入し、余剰を奪い去った⁴⁸⁾。その結果、正常な経路、すなわち上記の前提条件の合流が阻害され、第一、第二の条件の弁証法的発展は異なる様相を呈するようになったのである。バランは以下のように説明する。

「かくして、西ヨーロッパの資本主義的拡張の軌道にまきこまれた人々は、封建制度と資本主義との薄明かりの中で、二つの体制の最も悪い諸特徴と帝国主義的支配の全衝撃とに自ら耐えていることを知った。自分たちの封建貴族による抑圧——無慈悲ではあるが慣習によって和らげられている——のほかに、さらに内外資本家による支配——冷淡でただ商取引という枠によってだけ限界がおかれている——がつけ加わったのである。自分たちの

封建的過去から受けついだ反啓蒙主義と勝手気ままな暴力とが、現在の資本主義的合理性や一銭一厘ゆるがせにしない計算ずくの強欲と結びついたのである。かれらの搾取は倍加された。だが、その果実は、かれらの生産的富を増加させることなく、海外に運び去られたか、自国の寄生的ブルジョワジーを維持することに役立てられたのであった。かれらは底知れぬ苦悩のなかで生活したが、しかもかれらはよりよき明日についていかなる希望ももたなかった。かれらは資本主義の下で生活したが、資本の蓄積は皆無であった。かれらはかれらの昔からの生活資料、かれらの技術と仕事を失ったが、しかもそれらに代わる新しいものを提供すべき近代的工業は皆無であった。かれらは西ヨーロッパの進んだ技術とむりやりに接触させられたが、しかもかれらはいぜんとしてもっとも暗黒な遅れた状態にとどまっていたのであった⁴⁹⁾」。

西ヨーロッパの資本主義的拡張に巻き込まれた地域では、資本となるべき経済余剰が持ち去られたために資本主義の前提条件が揃わず、資本主義的生産様式は成立しなかった。その結果、封建制が維持されたばかりでなく、そこに資本主義的な合理性や強欲が加わり、強化されたのである。資本主義というシステムのもとで資本主義的生産様式を持たない、あるいは持てない情況、この情況こそが、エンゲルスのいう「再版農奴制」であり、周辺における資本の本源的蓄積の継続であり、後にフランクのいう「低开発の発展」であるといえよう。

第5章 資本主義の精神をめぐって

新旧移行論争の論点は多岐にわたったが、本稿での論点を整理したい。まず、ふたつの論争に共通するのは、そもそも資本主義という用語が何を意味しているかということであり⁵⁰⁾、資本主義を生産様式ととらえるのか、それとも市場制度ととらえるのかが対立の軸とされてきた。そこから旧移行論争では、封建制と資本主義をめぐって、何が生産様式、そして経済システムの転換をもたらしたのか、その究極的な原因とメカニズムを明らかにしようとする論争となった。もっとも、「内部矛盾」と「外的力」の相互作用が存在し、二者択一ではないことで一致をみた。フランクとラクハウの論争では、世界資本主義の下で生産様式としての資本主義が封建制と両立すること、さらに言えば中心が周辺から流通過程をとおして余剰を収奪する一つの経済システムであることが示されることとなった。

本稿で言及した論争の争点は以上のように整理できると考えるが、論争での発言、そして論争についての評価を概観したとき、資本主義を生産様式として把握することに対する説得力のある批判は管見の限り見当たらない。ドップが定義したように、マルクスの定義に倣う

のであれば、資本主義を生産様式と捉えることについて、スウィージー、フランクも異論はないと考えられる。それに対して、資本主義を市場制度と理解した場合、市場制度が生産様式に影響を与えたことが認められ、さらに世界資本主義の分析へと議論を発展させたことは高く評価され、そこに意義があったと考えられる。そして、この二つの資本主義理解の止揚が結果的に目指されることとなったと言えよう。

ここでドップが資本主義の定義を検討した際に言及したもうひとつの資本主義の定義、すなわちゾンバルトやウェーバーの資本主義理解について検討する必要があるだろう。計算、合理性、ブルジョワ精神、これらは論争のテーマとはならなかったものの、ドップは資本家が独立小生産者から生まれたと考えたとき、この定義を前提として、経済外的な制度の妨げがなくなれば自動的に資本主義が到達するかのよう主張しているのである⁵¹⁾。つまりドップが資本主義の定義を検討して指摘していたように、資本主義は歴史を通してある程度は見られることになるのである。

バランはこのような歴史を通して一貫した合理性という考えを退け、合理性を歴史的なものとして理解していた⁵²⁾。バランは以下のように言っている。

「実際に、封建制度に有利な観点から眺めるならば、封建制度の持続・安定と両立し、しかもその助けとなるようなものは、すべて生産的であり、かつ合理的であった。そして、支配的な社会制度の維持および正常な機能を妨害したり、あるいはそれらにとって不必要であるようなものは、すべて不必要であり、不生産的であり、かつ浪費的であった⁵³⁾」。

つまり、封建制度では封建制度下での合理性が存在しており、それが非合理的であると判断されるには、新たな制度の観点から封建制度をみる必要があるのだ。バランは資本主義社会での合理性を以下のように説明している。

「勃興しはじめたブルジョワジーの側に立つ経済学者たちは、旧制度をその社会経済組織の浪費性のゆえに酷評したり、旧制度が最も大事に育て上げた官吏や制度の多くが、寄生的な性格を持っていることを指摘することに、少しの良心の呵責をも感じなかった⁵⁴⁾」。

そしてその資本主義社会の合理性も、その外側に立てば違う様相を呈することになる。バランは以下のように言っている。

「したがって、資本主義的な論究の仕方を超えた、その外側の観点に立ってみれば、すな

わち社会主義社会の観点に立ってみれば、ブルジョワ的な経済的・社会的思考にとっては不可欠であり、生産的であり、合理的であると考えられたものの多くが、不必要で、不生産的で、浪費的なものになってしまうのである⁵⁵⁾」。

資本主義的な合理性も、その外側に立てば決して合理的なものではなく、歴史的に不変なものではないのである。バランは社会構造と人間の本性の関係について以下のようにいう。

「事実、肉体的欲求と精神的欲求とをもち、価値観と抱負とをもった個人は、歴史の過程の中で、かれが属している社会が変わるにつれて変わってきた。社会構造の変化がかれを変え、かれの本性がまた社会を変えてきた〈中略〉。実際、このような性格形成のメカニズムをつくりだし、物質的・心理的枠組みを、特定タイプの人間存在のために提供する社会的布置連関のこの能力こそ、この社会的布置連関を社会制度たらしめるのである⁵⁶⁾」。

人間の本性は歴史とともに変化し、その変化した人間の本性が社会を変えてきたのである。そして、その社会的布置連関は、そのような本性を有した人間をつくりだし、社会制度となるのである。

以上の議論から、バランはドップが検討した三つの資本主義の定義を弁証法的に止揚する視点を有していた。「内的矛盾」、「外的力」、そして「精神」の弁証法であり、「歴史」と「自然」と「主体」の弁証法である。そしてこの視点は、人間の社会、歴史に対する主体性を検討するもので、バランが経済決定論から逃れていたことを示している。さらに移行論争のテーマとはならなかったもののドップが意識せずに前提としていた資本主義の精神を歴史的なものと考えていたことも示された。つまり何らかの障害が取り払われれば自動的に資本主義が成立する、あるいは資本主義が人間の普遍的な本性に根ざしたものであるかのように資本主義を理解することをバランは退けていたのである。それゆえこの布置関係を明らかにし、そこにうずまく弁証法を検討することから、資本主義を本質的に批判することが可能となるのである。

おわりに

バランは、社会制度を判断する究極の基準を、客観的世界に存在し時間と場所によって左右される客観的理性に求めることになる。バランは以下のようにいっている。

「社会経済組織の本性、人間の諸々の可能性を、全面的に展開し発展させる社会経済組織の能力を判断しうる唯一の基準は、客観的理性である。マキャベリやホッブズのような人々が当時の社会の批判を企てたとき、その批判の基礎にあったものは客観的理性であったし、また、スミスとリカードの時代の封建領主や廷臣や既存の牧師たちがかれらの諸社会の発展に貢献しなかつただけでなく、かれらの社会から成長のすべての可能性を奪い去ったという理由からスミスとリカードをして、勇気を奮い起こさせ、あえてこれらの人々を寄生者と呼ばしめたものは、客観的理性であった⁵⁷⁾」。

このバランの客観的理性概念に影響を与えたマックス・ホルクハイマーは、近代に入り客観的理性が弱体化し、道具的理性に過ぎない主観的理性が優越していることを問題としていた⁵⁸⁾。「資本主義の終わりを想像するより世界の終わりを想像する方が簡単」な現状をバランが見たなら、客観的理性の弱体化を問題とするかもしれない。その一方で様々な資本主義の終焉も語られている。資本主義的な合理性が非合理であることが様々な分野で見いだされる今、資本主義の入り口はどのようなものであったのか、そもそも資本主義とは何であったのかを問い直す必要があるだろう。そしてその非合理性を明らかにし、合理的な社会を構想する必要はこれまでになく高まっていると考えられる。地球環境問題をはじめとして、有限性のなかで経済社会を考える必要に迫られているからである。資本主義的な合理性を批判し、新たな合理性を構築する批判が何よりも求められよう。

注

- 1) Jameson, Fredric (et al.), Žižek, Slavoj (ed.), *An American Utopia: Dual Power and the Universal Army*, Verso, 2016, p. 3. フレドリック・ジェイムソンほか著、スラヴォイ・ジジェク編『アメリカのユートピア：二重権力と国民皆兵制』書肆心水、2018年、13頁。
- 2) Fisher, Mark, *Capitalist Realism: Is There No Alternative?*, John Hunt Publishing, 2009, p. 2. セバスチャン・ブロイ、河南瑠莉訳『資本主義リアリズム』堀之内出版、2018年、10頁。
- 3) Dobb, Maurice, *Studies in the Development of Capitalism*, Routledge, 1946. 京大近代史研究会訳『資本主義発展の研究Ⅰ』岩波書店、1954年、同訳『資本主義発展の研究Ⅱ』岩波書店、1955年。
- 4) この論争は *Science & Society*, 14(2), Spring, 1950に掲載されたスウィージーのドップ批判から始まった。1954年に主要論文が一冊にまとめられ [旧版] (cf. Sweezy, P. M. [et al.], *The Transition from Feudalism to Capitalism: A Symposium*, Fore Publications, 1954)、1976年にさらにその後の関係する論文を加えて出版された [新版]。本稿では、その新版をもとに出版された以下に拠る。Sweezy, Paul [et al.], *The Transition from Feudalism to Capitalism*, AAKAR, 2006. 大阪経済法科大学経済研究所訳『封建制から資本主義への移行』柘植書房、1982年。
- 5) フランク＝ラクラウ論争については、以下の研究が示唆に富み、本稿も多くを負っている。cf. 望月清司「第三世界を包みこむ世界史像：新世界史論争と再版農奴制」『ドイツ史・マルクス・第三世界：望

月清司論文選』日本評論社、2019年。

- 6) 「プレナー論争」については、以下を参照されたい。cf. 武暢夫「工業化前のヨーロッパにおける農業の階級構造と経済発展：若干の論争問題 (1)」富山大学経済学部経済学会編『富大経済論集』28(3)、1983年3月、同「工業化前のヨーロッパにおける農業の階級構造と経済発展：若干の論争問題 (2)」富山大学経済学部経済学会編『富大経済論集』29(1)1983年7月、同「工業化前のヨーロッパにおける農業の階級構造と経済発展：若干の論争問題 (3)」富山大学経済学部経済学会編『富大経済論集』30(1)、1984年7月。
- 7) Wood, Ellen Meiksins, *The Origin of Capitalism : A Longer View*, Verso, 2002. 平子友長、中村好孝訳『資本主義の起源』こぶし書房、2001年。
- 8) 論争の簡潔な整理を含み、マルクスを検討したものとして、以下を参照されたい。隅田聡一郎『『資本論』第3部草稿における「歴史的考察」の再検討：新旧「移行論争」を題材にして』経済理論学会『季刊経済理論』53(3)、2016年、59頁。
- 9) バランのフランクへの影響については、以下を参照されたい。古松丈周「独立社会主義者と新従属理論：ポール・A・バランのアンドレ・G・フランク批判より」『旭川大学経済学部紀要』75、2016年3月、39-45頁。
- 10) Statements by Friends and Associates, *Monthly Review*, 16(11), March, 1965, p. 99.
- 11) Frank, Andre Gunder, *Capitalism and Underdevelopment in Latin America*, Monthly Review Press, 1967, p. xi.
- 12) Baran, Paul A., Economic Progress and Economic Surplus, *Science & Society*, vol. 17, no. 4, Fall, 1953. なお、この論文は遺稿集に収められた。cf. Baran, Paul A., *The Longer View: Essays Toward a Critique of Political Economy*, Monthly Review Press, 1969.
- 13) Baran, Paul A., *The Political Economy of Growth*, Monthly Review Press, 1957. 浅野栄一、高須賀義博『成長の経済学』東洋経済新報社、1960年。
- 14) 「バラン比率」を作成し、統計資料とともに分析したものとして、以下の論考がある。cf. Xu, Zhun, Economic Surplus, the Baran Ratio, and Capital Accumulation, *Monthly Review*, 70(10), March 2019. さらに、シュウの論考を受けて、移行論争に言及したものとして以下を参照されたい。cf. Lambert, Thomas E., Paul Baran's Economic Surplus Concept, the Baran Ratio, and the Decline of Feudalism, *Monthly Review*, 72(7), December 2020.
- 15) Dobb, *op. cit.*, p. 4f.『資本主義発展の研究 I』6-7頁。
- 16) *Ibid.*, p. 5. 邦訳、8頁。
- 17) *Ibid.*, p. 7. 邦訳、9頁。
- 18) *Ibid.*, p. 8. 邦訳、9頁。
- 19) *Ibid.*, p. 35. 邦訳、53頁。
- 20) *Ibid.*, p. 37. 邦訳、54頁。
- 21) *Ibid.*, p. 34. 邦訳、51頁。
- 22) *Ibid.*, p. 42. 邦訳、61頁。
- 23) Sweezy, Paul, A Critique, in : Sweezy, Paul [et al.], *The Transition from Feudalism to Capitalism*, p. 33. 邦訳、31頁。
- 24) *Ibid.*, p. 33. 邦訳、32頁。
- 25) *Ibid.*, p. 35. 邦訳、34頁。
- 26) *Ibid.*, p. 36. 邦訳、35頁。
- 27) *Ibid.*, p. 41. 邦訳、40-41頁。

- 28) *Ibid.*, p. 41. 邦訳、41頁。
- 29) *Ibid.*, p. 44. 邦訳、43頁。
- 30) *Ibid.*, p. 50. 邦訳、50頁。
- 31) バランからスウィージーへの手紙、1956年9月15日、Paul A. Baran – Paul M. Sweezy Correspondence, January to September 1956, https://monthlyreviewarchives.org/index.php/baran-sweezy/article/view/1956-01_1956-09/7221 (2020年1月16日閲覧)、ならびにスウィージーからバランへの手紙、1956年10月19日、Paul A. Baran – Paul M. Sweezy Correspondence, October to December 1956, https://monthlyreviewarchives.org/index.php/baran-sweezy/article/view/1956-10_1956-12/7220 (2020年1月16日閲覧)。なお、このエンゲルスのパンフレットの英訳が *Monthly Review* に掲載された。cf. Engels, Friedrich (Dickinson, John K., trans.), *The Decline of Feudalism and Rise of the Bourgeoisie* [1884], *Monthly Review*, 8(12), April 1957. なお邦訳は、以下。村田陽一訳「封建制度の衰退とブルジョアジーの勃興について」大内兵衛、細川嘉六監訳『マルクス＝エンゲルス全集』(第21巻)、大月書店、1971年。
- 32) 沖公祐「間という外部」法政大学比較経済研究所、長原豊編『政治経済学の政治哲学的復権：理論的〈臨界－外部〉にむけて』法政大学出版局、2011年、84-85頁。
- 33) Dobb, Maurice, A Reply, in ; Sweezy, Paul [et al.], *The Transition from Feudalism to Capitalism*, p. 60, 邦訳、61-62頁。Sweezy, Paul, A Rejoinder, Sweezy, in ; Sweezy [et al.], *The Transition from Feudalism to Capitalism*, pp. 103-104, 邦訳、104頁。
- 34) フランクの「移行論争」についての分析を検討したものとして、本稿では以下を参考にした。cf. 松原智雄「『封建制から資本主義への移行』に関する方法的諸問題（その2）」『苫小牧工業専門学校紀要』19、1984年3月、192-193頁。
- 35) Frank, Andre Gunder, *World Accumulation, 1492-1789*, Monthly Review Press, 1978, p. 54.
- 36) 松原が指摘するように、フランクによれば、16世紀の取引が好調な時期に世界市場の発展とともに東欧の貴族が農民を過酷に収奪したことで「再版農奴制」は成立したのである。cf. 松原智雄、前掲論文、193頁。
- 37) Frank, *op. cit.*, pp. 252f.
- 38) Laclau, Ernesto, Feudalism and Capitalism in Latin America, *New Left Review*, 1/67, May/June 1971. なお、以下では、本論文が収録されたラクラウの著書の頁数を記す。Laclau, Ernesto, *Politics and Ideology in Marxist Theory: Capitalism, Fascism, Populism*, Verso, 2012. 横越英一訳『資本主義・ファシズム・ポピュリズム：マルクス主義理論における政治とイデオロギー』柘植書房、1985年。
- 39) ラクラウの論文の骨子については、以下を参照されたい。cf. 望月清司、前掲書、280-281頁。
- 40) Laclau, *op. cit.*, p. 30ff. 邦訳、29-30頁。なお、訳文では、「周辺諸地域の封建的再編」について、「エンゲルスの語った〈再版農奴制〉」と添えられている。
- 41) *Ibid.*, p. 33. 邦訳、31頁。
- 42) *Ibid.*, p. 34. 邦訳、32-33頁。
- 43) *Ibid.*, p. 34f. 邦訳、33頁。
- 44) 「生産様式接合論」については、以下を参照されたい。cf. 若森章孝『資本主義発展の政治経済学：接合理論からレギュレーション理論へ』関西大学出版部、1993年、第Ⅱ部
- 45) 資本の本源的蓄積の継続について、ローザ・ルクセンブルクから従属理論、世界システム論への思想的展開を跡づけたものとして、以下を参照されたい。cf. 植村邦彦『ローザの子供たち、あるいは資本主義の不可能性：世界システムの思想史』平凡社、2016年。なお、フランクについては第3章で検討されている。また、資本の本源的蓄積の継続を明らかにしたローザ・ルクセンブルクを受容するス

- ウィーギーの見解については、以下を参照されたい。cf. 古松丈周「ポール・M・スウィーギーと資本主義発展の理論：ローザ・ルクセンブルク受容と世界」関西大学経済学会『経済論集』第67巻3号、2017年12月。
- 46) Baran, Paul A., *The Political Economy of Growth*, Monthly Review Press, 1957, pp. 137f. 浅野栄一、高須賀義博訳『成長の経済学』東洋経済新報社、1960年、181-182頁。
 - 47) *Ibid.*, p. 143f. 邦訳、189-190頁。
 - 48) バランは北アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドでは、西ヨーロッパの人々が移り住み定住者となったことを指摘している。人口が稀薄で国家形成も進んでいなかった地域で、移り住んだ西ヨーロッパの人々が新たな社会、資本主義的社会を作り上げたのである (cf. *Ibid.*, p. 140f. 邦訳、185-187頁)。
 - 49) *Ibid.*, p. 144. 邦訳、190頁
 - 50) 資本主義概念についての簡潔な整理として以下が参考になる。cf. 新田滋「資本主義、資本主義的生産、資本主義社会の区別について」専修大学社会科学研究所『社会科学年報』第54号、2020年3月、137頁。
 - 51) cf. 沖公祐、前掲論文、86頁。
 - 52) ウッドは「商業化モデル」が資本主義や資本主義的合理性の存在を前提しており、スウィーギーはその立場に立っていないことを指摘し、むしろドップのほうが封建制度の解体と資本主義の勃興を同一の過程と考えていることを指摘している (Wood, *op. cit.*, pp. 41-43. 邦訳、49-54頁)。このようなスウィーギーの立場にバランの影響があったことは十分に考えられる。なお、本稿では検討していないが、ウッドは市場の機能が歴史的に変化したこと、つまり「機会」から「命法」に変化したことを指摘している (*Ibid.*, p. 6ff. 邦訳、14-17頁)。
 - 53) Baran, *op. cit.*, p. 24. 邦訳、31頁。
 - 54) *Ibid.*, p. 24. 邦訳、31頁。
 - 55) *Ibid.*, p. 25f. 邦訳、32-33頁。
 - 56) *Ibid.*, p. 26f. 邦訳、34頁。
 - 57) *Ibid.*, p. 28. 邦訳、37頁。
 - 58) 「客観的理性」に対する哲学は、存在者の基本的構造を認識し、人間の運命について理解することを目指す理性である。それに対して、「主観的理性」は、自己保存のための手段の妥当性を判断する理性である。詳細は以下を参照されたい。cf. 古松丈周「ポール・A・バランとフランクフルト学派：独占資本主義と国家資本主義」関西大学大学院経済学研究科院生協議会『千里山経済学』第44巻第1号、2010年9月、37頁以下。